

海水浴場からエビの新種を発見

動物学研究科 主任上席研究員 駒井智幸

発見の経緯

2013～2015年にかけて行われた、干潟や砂浜に生息するエビ・カニ類の種多様性を解明することを目的とした調査により、ユムシ類（環形動物門ユムシ綱）の巣穴に共生するテッポウエビ類が南房総（館山市の北条海岸と南房総市の多田良浜）と熊本県天草市（本渡干潟）で発見されました。精査したところ、テッポウエビ属 *Alpheus* の未記載種であることが判明し、新種として命名・記載する論文が動物分類学の国際専門誌（マグノリア社ズータクサ）に2015年12月15日付で公表されました。

論文：Komai, T. 2015. A new species of the snapping shrimp genus *Alpheus* (Crustacea: Decapoda: Caridea: Alpheidae) from Japan, associated with innkeeper worm *Ikedosoma elegans* (Annelida: Echiura, Echiuridae). *Zootaxa* 4058: 101–111.
<http://dx.doi.org/10.11646/zootaxa.3793.1.5>



図1. 東京湾外湾にあたる房総半島の採集場所（赤い星印）。

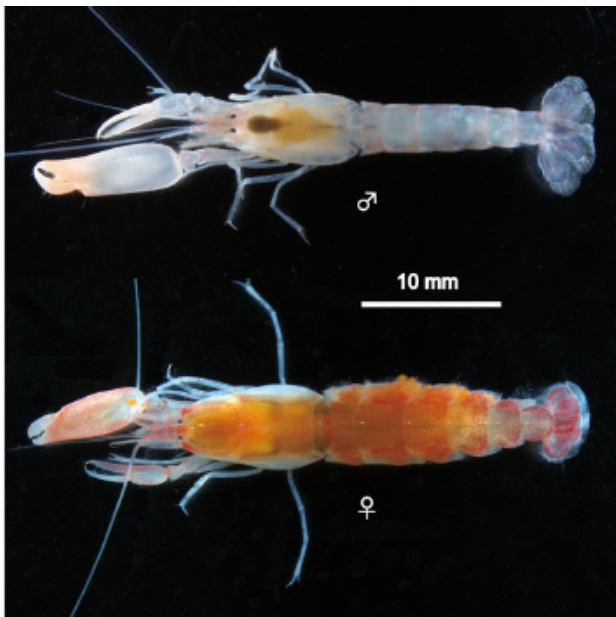


図2. ヌメユムシテッポウエビの雌雄。雄がホロタイプ、雌がアロタイプ（千葉県立中央博物館所蔵、CBM-ZC 13128, 13129）。



図3左、ユメユムシテッポウエビの宿主ユメユムシ。伸ばすと体長40 cmを超えます。右、採集器具のヤビーポンプ。長さは75 cmのものを使用。

テッポウエビ属とは？

コエビ下目テッポウエビ科に属し、世界で300種を超える種が知られる大所帯です。磯や干潟～深海に生息し、ハゼ類などの魚類との共生例がよく知られています。ユムシ類と共生する種はこれまでに世界で5種が知られていました。テッポウエビ類は1番目の胸脚が大きなハサミを形成し、片側を使って大きな音を発します。雌雄ペアで仲良く暮らす種が多いです。

名前の由来：世界共通の名前である学名は *Alpheus ikedosoma*（読み方：アルフェウス イケドソマ）としました。属名の *Alpheus* はギリシャ神話に登場する神に因みます。種小名の "ikedosoma" は、本新種のすみかを提供するユメユムシの属名です。標準和名は、やはり宿主に因み、「ユメユムシテッポウエビ」と名付けました。

近縁種との関係：形態を詳しく調べたところ、テッポウエビ種群とカスリテッポウエビ種群の両方に共通する特徴を具えていて、かなり特異な種であることが分かりました。色は全体に薄いピンク色をしていて、雌の方がやや色が濃いです。なかなかきれいなエビだと思いませんか。

発見の意義：本新種の共生するユメユムシは70～80 cm ぐらいの深い巣穴を掘って生息しています。そのため、見つけること自体がまず困難でした。今回はヤビーポンプという、砂中に生息する生物を吸引して取り出す道具のおかげで見つけることができました。今回、ユメユムシテッポウエビが見つかったのは、海水浴場（館山市北条海岸）や潮干狩り場（天草市本渡干潟）といった私たちの生活に身近な環境で、発見自体が驚きでした。身近な場所であっても目に見えない場所にはまだまだ未知の生物がひそんでいることを示す例となりました。これまでの干潟・砂浜調査により多くの標本が博物館の資料として蓄積されており、今後もエビ・カニ類の新種が発見されると予想されます。

現在のところ、本新種とユメユムシの共生関係は密接であると考えられています。ユメユムシがいなくなってしまうと、エビも住むところがなくなってしまいます。いつまでも泳いだり、潮干狩りが楽しめるよう、きれいな海を守っていききたいものです。